

**第6回エコエリアやまがた推進コンクール
優秀賞（エコエリアやまがた推進協議会長賞）**
※掲載している情報は平成23年度時点のものです。

名称	泉田さといも生産組合
所在地	新庄市

1. 取組の背景・経過等

(1) 泉田さといもは江戸時代より「四ッ谷芋」の名で古くから親しまれてきた。昭和50年代には農協の部会組織も存在するなど栽培も盛んであったが、平成に入ってから生産者も減少し、数名の生産者が細々とその栽培を続けていた。



(2) 代表の奥山聡氏は、就農以来泉田さといもを作り続けていたが、消費者から「最近はおいしくない」との声を聞き、もう一度おいしい泉田さといもを復活させるため、若い仲間と本組織を平成15年度に設立した。以前は化学肥料の使用のため、えぐみが強くおいしくなかったことを考慮し、化学肥料ではなく有機質資材を使った土づくりでさといも栽培に取り組んでいる。

(3) 現在は、若手5名の構成員で3haのさといもを作付し、その出荷量は約30tとなっている。早期出荷の取組や品質のこだわりにより差別化を進め、皮が薄くぬめりも強い「泉田さといも」のブランドを確立するに至った。

(4) 発展の経過

H15	泉田さといも生産組合設立
	泉田さといもまるごと体験ツアー実施
H17	泉田いものこフェスティバル開始
H18	堀り取り機械導入(3台)
H19	新庄まつりと味覚フェア(東京都板橋)参加
H21	能代おなごりフェスティバル参加
H22	北海道山形県人会いも煮会参加

2. 農業経営・技術と取組姿勢

(1) 環境に配慮した農業技術の実践と工夫

ア. 土づくりの実践・工夫

さといもは連作が難しい作物であり、当該組織では連作は原則2年までとしている(2年作付け後は大豆やねぎを作付けしている)。そのため、土づくりに重点的に力を入れており、舟形マッシュルーム生産組合から出る廃棄菌床を有効活用し、それに複合菌体と米ぬかや砕いた貝殻などを混ぜて完熟堆肥にして土壤に投入している。また、その際には土壤分析を行い、その結果により施用量を調整している。(平均2t/10a)

イ. 化学肥料、化学合成農薬の削減

化学肥料は使わず、化学合成農薬の使用は慣行比5割以上削減しており、特別栽培農産物の認証を受け安全安心な商品提供を行っている。

(2) 持続的な経営確立

ア. 早期出荷技術の確立

生産コスト低減に向けて、使用する農薬や化学肥料の削減を土づくりとともに進めたことが特別栽培農産物になったとの考えのもと、基本的には地産地消に取り組んでいる(通販などで県外にも出荷している)。

また、慣行体系では、9月以降に孫芋が成熟した段階での収穫となるが、当該組織では、8月中旬に出荷できるよう孫芋成長を待たずに子芋を出荷する体系を取り入れている。したがって、慣行体系と比較し収穫量は落ちるもの、お盆や新庄祭りの需要期に商品提供を行うことにより、早期産地として高単価で取引してもらえる販売ルートを確立している。

3. 周辺等への影響力・普及力

(1) 消費者等との交流、食農教育・環境教育への参画等を通じて消費者等の環境保全型農業に対する理解と関心の増進に貢献

ア. 食育活動への貢献

地元の小学校や中学校において、さといもの生産や歴史、体験等の指導を行っている。

また、平成 18 年度より、学校給食への食材提供を開始し、平成 21 年度からは新庄市内の全小中学校にさといもの供給を行うようになった。

イ. イベント活動等への参加

地元ばかりではなく県内外で実施されるイベントにも積極的に参加している。また、平成 17～21 年度までは「泉田さといものこフェスティバル」を主催し、地産地消と地元産さといものPRを行っていた。

4. その他特記事項

(1) 異業種連携事業

生産量の増加に伴い、廃棄する親株の有効利用について以前から考えており、商工会議所に相談したところ、焼酎製造の提案があった。そこで、廃棄処分していた親株を利用して商工団体、食品加工販売企業、流通企業と連携して泉田さといも焼酎などの商品開発までに至った。また、この親株を地元の農協の雪むろを使って夏期に保存したりと環境に配慮した農商工連携によって付加価値の創出に大きな成果を上げている。(焼酎には泉田さといものが 30%以上使用され、甘みがあり、なめらかな味わいに仕上がっている。)



(2) 機械化体系の確立

ほ場準備から定植、収穫及び調整までの機械化体系を実現している。

特に、定植機については、市販品(ポット定植)を改良し、芽出した種芋を直接植え付ける作業体系を確立したことにより、育苗作業の省力化と育苗土等の資材コストの削減を可能にした。

5. 取組の成果と展望

「泉田さといも」は早期出荷の取組や土づくりに力を入れた品質へのこだわりにより、差別化を進めていくことでブランド確立に至った。現在も土づくりは研究中であり、連作障害が起こらないようにどうすべきか取り組んでいる(残渣をなるべく残さないよう取り除いたりと物理的な取組など)。

今後は現在5名で組織されているこの団体の規模を拡大し、次世代にこの泉田さといもをつなげていくためにも土づくりに力を入れて取り組んでいく。また、山形県独自のさといもの品種改良の開発に協力していきたい。

さらには、これらの活動を通じて、地域全体の農業の維持や活性化につなげていきたい。

2種類のブランドシール

